

バケーションin SUMMER！！

すずめいと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の男子高校生が夏休みを女の子と一緒に過ごす…。そんな夏休みの日常を描いた小説です。話数は、『夏休み○○日目』のように表しています。

目次

プロローグ／夏休み0日目	1
夏休み1日目	5
夏休み2日目	10

プロローグ／夏休み0日目

『えー、今日で1学期が終わるわけでありまして、明日から夏休みが始まります。生活リズムを崩さないように…』

「ふう…。校長の話は相変わらず長いな…。でも、明日から夏休みかあー、今年の夏休みは思いっきり楽しむぞー！」

と、浮かれている僕の名前は 朝月 桔梗《あさつき ききよう》。月ノ宮高校の1年生だ。今日は終業式ということもあつてみんなソワソワしている。まあ、明日から夏休みが始まるわけだし、当然といえば当然だよな。

『桔梗はさ、夏休みの予定とか決まってる？』

「いや、僕はまだしつかりとは決めてないよ？」

『えーじゃあさ、私とどこか出掛けない？』

「え、でも僕もまだ予定立ってないからさ…」

『えー、こんなに可愛い子が誘ってるんだよ？一緒に遊ぼうよおー！』
この子は柊木 杏子《ひいらぎ あんず》。同じクラスの女子だ。僕はあまり女子とは面識がないが、杏子は何故かよく僕に話しかけてくれる。

「んー、空いてる日があつたら連絡するよ。」

『絶対だからね？絶対に連絡してよ!!』

「わかりましたー。」

『あー！その言い方！絶対わかってない！か・な・ら・ず、連絡してよねー！』

「う、わかったよ。連絡するよ」

『絶対だからね！バイバイ！』

今日は午前中で学校が終わりだ。そろそろ僕も帰ろうかな。…と思っただけどまだ帰るのには少し早いかな。どっかのファストフード店にでも寄り道していこう。

『いらっしやいませ』

『ご注文をお伺いします。』

「えと、ルナバーガーのセットを1つ。飲み物はオレンジジュースで」

『かしこまりました。しばらくお待ちください。』

「テディバーガーなんて久しぶりに来たな……まあ、こっちの道通ることなんて滅多にないから仕方ないか。」

この店には中学の時に幼馴染とよく来ていた。でも、別々の高校に進学してからは会うことも少なくなり、あまり連絡も取らなくなっていた。アイツ、今どうしてるのかな。

『ルナバーガーのセットのお客様ー！』

「あ、僕です！」

「ハムっ！うん！やっぱりここのハンバーガーは美味しいな！また近いうちに食べに来ようっ！」

僕が食べているハンバーガーは目玉焼きが挟まっていて、とても美味しいのだ。でも、やっぱり一人で食べるとちよつと寂しいな。ふと、時計を見ると昼の3時を少し過ぎたところだ。

「さて、と食べ終えたしそろそろ帰るかな。今から帰れば誰かしら家にいるだろう。」

『ありがとうございます。』

「っ！流石にこの時間の日差しは堪えるな……！」

今年の夏は暑い。というよりも熱いという方があってるかもしれない。それくらい暑いのだ。

「あ、そうだ。帰る前にあそこにも寄っていこう。今日はいるかもしれないし」

あそこ、というのは中学の時の思い出の場所だ。僕の家のお近くにあり海岸のことで、小さい頃から幼馴染といつもそこで遊んでいた。

「…やっぱり今日もないか…はあ」

『ねえ、もしかして、桔梗？』

「その声は、綾女？」

『やっぱり！桔梗だ!!久しぶりだね！』

「そっちこそ！久しぶり！」

彼女は神崎 綾女《かんざき あやめ》。僕の幼馴染だ。久しぶりの再会を2人で喜んだ後、僕たちはいろんな話をした。中学の時の思い出話、今の学校の話、他にもいろんな話をした。もちろん、恋愛に

ついても。

『ねえ、桔梗ってさ、好きな人とか…いる?』

『そ、そういう綾女はどうなのさ!』

『わ、私はある…よ?って、私のはどうでもいいの!』

『え!誰誰!僕知ってる人!』

『い、言わないわよ!でも…多分、よく知ってると思うな…。私ね、この夏休み中に告白しようと思ってるんだ。』

『そう…なんだ。頑張ってよ!』

僕は綾女に憧れていたからかなりショックだった。でも、彼女の恋愛だから、彼女の好きにすればいいと思う。僕は応援しかできないから。

『…うん、ありがと。あと、さ。今度の日曜の午後空いてる?』

『日曜の午後ねえ…空いてると思うけどなんで?』

『夏祭り…じゃん?一緒に回らない?』

『え、僕で良いの?好きな人とか誘えば?』

『桔梗が良いの!だから誘ってるんでしょ?』

『んー、わかった!一緒に行こうか。』

『ありがと!』

僕は彼女の笑顔がこの世で1番好きだ。

『そろそろ暗くなつて来たから帰ろつか。』

『そうだね。それじゃあ、日曜日にね!』

『うん。バイバイ!』

さて、とそろそろ夕ご飯の時間だ。家に帰らなくては。

『ただいまー』

『あ、にいちゃんおかえりー』

妹が出迎えをしてくれた。妹の名前は瞿麦(なでしこ)僕の1つ下の中学3年生だ。

『お、瞿麦!そのアイスちょうだい!』

『冷凍庫にはいつてるよん』

『やった!』

『ほんつとにいちゃんはアイス好きっていうかスイーツ好きだよ』

ね。』

「なんだよー！悪いか？」

僕は昔からスイーツが大好きだ。和菓子に洋菓子、スナック菓子になんでもござれだ。ちなみに、1番好きなお菓子はモンブランだ。

『いやあー、私的には大歓迎なんだけどさ。食べてくれる人がいるわけだしねー』

「どンドン作ってくれて構わないからな！いくらでも食べるからさ！」

『でもそろそろ夕ご飯だよ？ご飯の後にアイス食べたら？』

「そうだなー、そうするか。」

『今日の夕ご飯はねー、なんと！塩ラーメンだよ！』

「おお！…つて、インスタントかよ!!」

『だってえ…今日からパパ海外出張だし、ママもそれについていっちゃうしさあ…』

「あ、そういえばそうだった…。」

僕らの両親が今日から2ヶ月ほど海外出張に行くと言っていたのをすっかりと忘れていた。

「じゃあ、今日はそれで我慢するか。」

『明日から私がいちちゃんの為に料理するからね！』

「お、期待してるぞ！瞿麦！」

『うん！』

「今日は疲れたから先に寝るよ。おやすみ」

『んー？おやすみい。』

…明日から、夏休みが始まる。

夏休み1日目

「ふあゝあ…今何時だ…？うーん、7時過ぎか。もう少し寝よ。」

『にいちゃん、朝だよー！起きてー!!』

「ううん…もう少しだけ…。」

『生活リズム狂わしちゃダメだよ？ほら、起きて!』

「うう…わかった、わかったよ…。」

『それでよし！朝ごはん、もう出来てるよ!』

「さすが瞿麦《なでしこ》。ありがとう」

『どういたしまして♪』

「はむっ、モグモグ…」

『どお？美味しい？私特製のジャムのトーストは』

「美味しいよ。今度これのタルト作ってくれると嬉しいな」

『…!?わかった！挑戦してみるね!』

「ふふっ、ありがと。」

『にいちゃん、今日の予定は?』

「うーん、特に決まってるけど課題全部終わらせちゃおうかな…?」

『ふーん、わかった!じゃあ、お昼ご飯はお部屋に持っていくね!』

「良いよ、呼んでくれれば食べに行くからさ。」

『ん、わかった。』

「ふうっ!それじゃ、そろそろ部屋に戻って課題始めるよ。」

『はーい、頑張って!』

高校に入ってから驚いたことはとても課題が少ないことだ。中学の時とは比べ物にならないくらい少ない。これくらいならもしかしたら昼はまでには終わるかもしれない。

「さて、本気でやりますか…!まずは…」

僕はまず数学をやった。僕は数学が苦手なのだが、2時間ほどで終わった。

「この調子なら…!」

僕はその後、国語、理科、地理、現代社会、とどんどん進めていき、本当に昼前に全て終わってしまった。

「今何時だ…？うわ、マジで昼前に終わっちゃったよ…！午後何するかなあ」

『にいやーん！そろそろお昼だよー？』

「はーい、わかった！」

お昼ご飯はなんだろうな

『今日はねー、そうめんと天ぷらだよ！』

「天ぷら！いいねえー」

『でしょ？私も食べたかったからさ〜』

そういえば瞿麦は天ぷらが大好きだったっけ？今度美味しい天ぷら屋さんにも連れてってあげよつと。

「いただきますーす」

「サクツ！ハフハフ…」

揚げたての天ぷらは本当に美味しい。サクサクで中はふわふわの海老天。僕も大好きだ。

『どお？おいしい？』

「とてもおいしいよ。また作ってね」

『うん！また後で作ってあげる！』

「ふう…ご馳走さま。」

『お粗末様でした。あ、にいやんこの後も課題やるの？』

「いや、終わっちゃって暇なんだよね」

『あ、そうなの？私この後出掛けちゃうけどだいじょぶ？』

「別に構わないけど、どこ行くの？」

『夏美《なつみ》ちゃんと芽美《めぐみ》ちゃんの家！一緒に課題やるんだ♪』

「ちやんとやるんだよ？」

『わかってるって、大丈夫だよ！あ、時間に遅れちゃう！行ってきますー！』

「行ってらっしゃい。椿《つばき》によろしくね」

『うん！行ってきまーすー！』

「ああ、そういえば杏子《あんず》が空いている時に連絡くれて言っただっけ？暇だから電話でもしてみよっかな」

トウルルル…

『もしもし？桔梗《ききよう》？どうしたの？』

「お、杏子？いや、暇だったから掛けただけでそんなに理由はないよ。なんか作業中だったかな？」

『ううん、そういうわけじゃないけど本当に連絡くれると思わなかったから。』

「そりゃあ、あんなにしつこく連絡しろ！って言われたらねえ。」

『あははっ！そんな理由？まあ、いいけど。ところで、午前中桔梗は何してた？』

「ずつと課題やってたよ。いやあ、昼までに終わると思わなかったよ」

『ええっ!?もう全部終わったの？すごいねえ…あんなに沢山あったのに…!』

「でも中学の時よりは少なかったからさ。」

『あー、確かにそれはあるかもね。教科の分増えたけどね』

「そうそう。だから意外とすぐ終わるよ。だから今すごい暇なんだよね」

『あー、その気持ちわからなくないかも。やる事なくなっちゃうよね。』

「ううん。本当だよね」

『あつ！そういえば明日暇かな？良かったらなんだけど、一緒に夏祭り行かない？』

「あー、ゴメン！明日はほかに行く人が決まってるんだよね。」

『あ…。そうだよね、こっちこそゴメン』

「いやいや、こちらこそ」

『そろそろ切るね？楽しかった！ありがとう』

「うん、掛けたのはこっちからだしね。色々話せて楽しかったよ。ありがとう！」

『じゃあね！また今度ね！』

ツー、ツー、ツー…

「杏子から遊びに誘われるなんて珍しいな…。どういう風の吹き回しだろ？」

ふと時計を見ると、そろそろ夕方の5時だ。瞿麦がそろそろ帰ってくる時間だろう。

ガチャツ

『にいちゃん、ただあいまー!!』

「お帰り。楽しかったか?」

『そりやもちろん!ちゃんと課題もやったよ!』

「おー、偉いな。早く終わらせて夏休みを楽しめよ?」

『うん!』

「ほら、一緒に夕飯作ろうぜ。」

『今日は何にする?色々揃ってるけど?』

「うーん、それじゃあ、魚にしよう!」

『うっ…、私魚触れない:!!』

「じゃ、じゃあ僕が捌くよ…!初めてだけどね…。」

『あ、ありがと…!他の料理やっちゃうね。』

「うん、お願い。」

魚を捌くのなんて初めてだ…!ちよつとキモチワルイ…。でも生きてないからまだマシかも…。

「ふう…やつと捌けた。血でベトベトだよお…ウヘエ」

『塩焼き!それ塩焼きにしよ!』

「いいね!塩焼きならすぐできるし良いかも。」

塩をたっぷりと振りかけてオーブンにセットして、つと…後は焼くだけ!

「瞿麦ー、もう焼いちやうけどいい?」

『良いよー』

「おっけー!」

部屋に魚の香ばしい香りが充満してきた。お腹も減ってきたところだ。早く焼けないかなあ。

チンツ!

『にいちゃん、お魚焼けたみたいよー!』

「うん、お皿に盛ってつと…。よし!ご飯にしようか!」

『うん!』

『いただきまーす!!』

2人で作ったご飯はとても美味しい。みんなで作るとその分美味しくなる気がする。

『ごちそうさまでした!』

もちろん食器も2人で片付けた。2人でやれば速さも2倍だからね。

「さて、と僕はそろそろ寝るよ。何かあったら起こして良いからね。」

『うん、わかった!おやすみなさい』

「おやすみ。」

明日は綾女《あやめ》と祭りだ。ちゃんと寝て明日を思いっきり楽しまなくちゃ。

夏休み2日目

「ふあゝあ…。今日はちゃんと起きなくちゃね。」

今日は綾女《あやめ》と一緒に夏祭りを回るのだ。朝のうちからしっかりと準備しておかなくては。

『にいちやくん？起きてる？』

「うん、起きてるよ。どうしたの？」

『今日のお祭り、誰かと行く予定…ある？』

「あー、ごめん。綾女と一緒に回る予定なんだ。」

『うーん、そっかあ…。しよーがないね』

「もしかして、一緒に回れたかったの？それなら一緒に回る？綾女も瞿麦《なでしこ》ならおつけーしてくれるだろうし。」

『ううん。そうじゃなくて、にいちやくんと一緒に回りたいって子がい
たの。』

「え、誰だろう…？」

『んとね、夏美《なつみ》ちゃんと芽美《めぐみ》ちゃんだよ。』

「あいつらか…。でも、断っておいてよ。ごめんねって伝えておい
て。」

『うん、わかった！』

朝ごはん食べたら風呂入って、祭の準備するか。

トウルルル…

「もしもし？綾女？」

『あ、桔梗《ききよう》？おはよう！』

「おはよう。ところで、どうかしたの？」

『ううん、でもちよつと確認したいこと。』

「確認？」

『うん。今日何時くらいにどこ集合とか決めてなかったよね？それ
決めようかなって。』

「ああ、確かに決めてなかったね。どこにする？」

『あの…ね？桔梗の家がいいなあ…って思ってるんだ。』

「え、僕のうち？」

『う、うん…。ダメだったらそれでいいけど…。』

「うちは別に平気だよ、うん。じゃあ家で待ってるよ。」

『ほんと!? やった…。!じゃあ、午後1時くらいに迎えに行くね?』

「わかった! 待ってるよ。」

『うん! じゃあ、また後でね。』

「うん、また後で。」

ツー、ツー、ツー…

「よしっ! あと2時間もあるから、さっさと準備してゆっくりするか。」

寝汗がすごかったからまずは風呂入ろう。勿論湯舟にゆっくりと浸かってね。

「ふうー、スツキリした…。!ん? あと30分か、楽しみだな…。!」

祭会場で何をしようか、どうやって回るかを考えているうちに時間はあつという間に過ぎた。

ピンポーン…

『あの、神崎です…。』

「あ、今行きます!」

ガチャツ!

「やあ、綾女。こんにちわ。」

『こんにちわ。今日はよろしくね!』

「う、うん。こちらこそよろしく。」

『どうしたの? 顔赤いけど、大丈夫?』

「い、いや…。その浴衣がさ。」

『似合って…。ないかな?』

「い、いや! その逆だよ! とても似合ってる。それに、可愛いよ…。!」

『えと、その…。ありがと。／／』

「そろそろ、行こうか…。?」

『う、うん!』

祭会場の神社は歩いて10分くらいの場所にある。ただ、今日は人がとても多くて流石に10分ほどでは着かなそうだけど。

「顔赤いけど大丈夫?」

『えっ!?だ、だいじょうぶだよ…!アハハ…』

「そう?それならいいけど…。辛かったらちやんと言つてね?風邪引かれても困るからさ…?」

『…好きな人とお祭なんて緊張するに決まってるよお…。』

「ん?なんか言つた?」

『な、なんでもないよ!ほら、会場見えてきたよ!』

「本当だ。じゃあ、最初にどこ行きたい?」

『えつと…、綿あめ!綿あめ食べたいな!』

「おつけー!じゃあ、綿あめ屋さん行こうか!」

『あつちの店の方が大きいよ!あつちに行こ!』

「本当だね!じゃあ、あつち行こう!」

『うん!』

綿あめ屋台に着くとおじさんに「可愛い子連れてるな!」ってからかわれてしまった。綾女の顔が真っ赤になっていた。多分僕の顔も同じく赤くなっていただろう。

『綿あめ買ってくるね…////』

「あ、僕が買ってあげるよ!」

『え、そんな…悪いよ。』

「いいっていいって!」

僕は自分と綾女の2人分の綿あめを買った。その時おじさんに「彼女か?」と聞かれたが、綾女には聞こえていなかったみたいで安心した。

『あの、ありがとう…!』

「ふふつ、いいよいいよ!今日は全部僕の奢りだよ!」

『えっ!それは悪いよ…!』

「綾女に誘われるまで祭行こうと思わなかったからさ、その分のお礼させてよ!」

『それなら…うん!お言葉に甘えて!』

「それじゃあ、祭思いつきり楽しむぞー!」

『おー!』

「次どこ行く?かき氷?りんご飴?」

『うーん…かき氷が良いな!』

『いいね!じゃあかき氷行こっか!』

『うん!』

かき氷屋台は意外と近くにあった。というか周りにたくさんある。

「何味がいい?」

『えつとね…、レモンとイチゴ!』

「おっけー!」

シロップはかけ放題だったので、2味でも3味でもかけることができた。綾女は昔と変わらずレモンとイチゴだった。

「はい!かき氷。」

『ありがとー!あれ、桔梗は食べないの?』

「ああ、僕はいいよ。」

『ふーん、そっか。それじゃあ…こっち向いて?』

「ん?」

『一口、あげる♪』

「はふ、シャリッ!」

氷のしやりしやり感と冷たさが口の中に広がっているのはわかった。でも驚きと恥ずかしさで味は分からなかった。

『どお?美味しい?』

「う、うん!美味しいよ!」

『良かったー!それじゃあ、私も…ハムツ!あ、間接キス、しちやった…//』

「な、何言ってるのさ//」

『アハハ…。ねえ、ちよつと疲れたから休めるところに行きたいな?』

「そうだね、ちよつと休もうか。」

僕たちは神社の中にあるベンチに腰掛けた。綾女はあまり元気がなさそうだった。

「ねえ、綾女?大丈夫?」

『う、うん。大丈夫…。だけど、桔梗に聞いて欲しいことがあるの…。』

「僕に?僕で良ければ話聞くよ?」

『ありがとう。実は…』

綾女の話聞いた時、僕はとても驚いた。なんと、夏休み明けに引越すというものだった。

『…今通ってる学校も遠くなっちゃうから転校するの。まだ転校先は決まってないけど、

中頃には通知が届くって。引越しちゃうと桔梗と更に会えなくなっちゃうからさ…。だから、夏祭りに誘ったんだ…。』

「でも、なんで僕なの？好きな人と誘えば良かったのに…。あ、そうか。そういうことだったのか…。」

『うん…。それを伝えたくて誘ったの。だから、言わせて…。』
「う、うん…。」

『私は桔梗の事がずっと昔から好きでした。だから、だから私と付き合ってもらえませんか…。？』

ずっと好きだった綾女から告白されるとは思ってもいなかった。最初ははからかっているのかなとも思ったけど、綾女の目は本気だ。

「…僕もずっと昔から綾女の事が好きでした。なので、どうかよろしくお願いします…。!!」

『本当に…。？やったあ…。！私たち、両思いだあ…。!!これからよろしくね。桔梗！』

「うん！綾女の期待に応えられるように頑張るよ！」
『私は桔梗が好きなんだから、そのまんまがいいな♪』

「う、うん…／／／」
『て、照れないでよね…。！私まで照れちゃうじゃん…／／／』

「それにしても、綾女引越すのかあ…。」
『うん。でも、私に会いに来てよ？私の彼氏なんだからさ！』

「うん、もちろんだよ。」
『あ、ありがとう…。／／』

「それじゃあ、今年の夏は沢山思い出作らなくちゃね！」
『うん!!楽しい思い出沢山作ろうね!』

「じゃあ、次はどこ行きたい？」
『桔梗の部屋!』

「えっ!ぼ、僕の部屋?」

『うん！…だめかな？』

「大丈夫だよ！それじゃ、うち…行こうか？」

…という事で、僕の家綾女が来ることになった。夜遅くに女の子を家に連れ込むと両親に何か言われそうだが、今回はないので安心だ。綾女に、家族は心配しないのかと聞いたら『友達の家で1週間泊まる』と言ってあるそう。なんと仕事の早いことだろう。…って、もしかして1週間うちに泊まるつもりなのか!?